

サラミン。サルミラ（人間は人間だ）

日野善太郎

(一)

「善やん、チョット頼まれてくれへんか」

「何ですか」

多田神社の桜もほころびかけて、めっきり春めいて来た或る日の午後でした。

雨で仕事は休みでしたが、その雨も、つい先頃までの冷たさはなく、風景をなごやかに煙らせる霧のような降り方をしています。

みんな、どこかへ遊びに行つて、飯場はひっそりとしています。

元請けに提出する書類の作成が思ったより手間取つて、おそい朝めしに顔を出した私に、姐御が声をかけました。

「神戸まで行つて来て欲しいんや」

「神戸？ 今からですか」

出来上つた書類を、徒歩で二、三分の元請け事務所へ届ければ、後は用のない身でしたが、せつかくの休みだからカメラをかかえて出かけようと思つていたのです。

「別に今日でなくてもええねんけど……期限のあることやし」

「何の用事ですか？」

「これやけどな」

差し出された小型の手帳のようなものを何気なく受け取りました。

「ウチは役所みたいなん苦てやから、手続きたら何たらもう、かなんねん」

姐御の弁解めいた言葉を聞きながら、手帳にしてはうすく、免許証やパスポートとも違うらしいものに目を落

して、思わず息を呑みました。

外国人登録証

考えれば驚くようなことではないかもしれませんが。

平山姐御は朝鮮人であり、朝鮮人であるということは当然外国人なのであり、であるならば外国人登録もまた当然で、そこに何の不思議もなく、異議も、違和感もしはさまれる余地はないのです。――しかし

目の前のその人が外国人だなんて、突然そんな証拠をつきつけられるようなことをされては、困つてしまいます。

一瞬の混乱――でも申しましようか。私はそのとき、自分でも簡単には説明しにくい精神状態の中で、立ちすくんでしまいました。

この飯場に來て七、八年、親方一族が朝鮮人であることは、たとえば、平山親父は男で、姐御は女であるという認識と同じような、わざわざ註釈をつける必要もないほどの認識であつて、それを今更、驚くようなことでも何でもないのです。

しかし、だからこそ、それは私の意識の表面にはあざとく浮かんできません。ふだんは忘れている――と言つては正確ではありませんが、一々意識して窮屈に暮しているわけではないのです。

外国人登録のことも、私はすでに知識として知っていました。詳細は知らなくとも、そういう制度がある、という位には知つていたのです。

だが、それと平山姐御（及び松本一族）を結びつけて考えたことは一度もありません。

ウカツといえはウカツです。

もしかしたら、私には、外国人に紅毛人という漠然とした錯覚があつたのかもしれないのです。

外国という言葉からの連想が、アメリカ、ヨーロッパに直結し、外国人といえは、紅毛碧眼の白色人種を直ちに連想するのは日本人一般の感覚で、私だけのものではないような気がします。

少くとも、外国人という言葉が黄色人種（中国人や朝鮮人）にすぐ結びつける日本人は、余り見当らない気がします。

その錯覚が、外国人登録と言つても、アメリカ人イギリス人、フランス人、ソ連人という風に連想され、その連想の陰に朝鮮人が消えているのかも知れません。

ということを下敷きにして、更に――

今、私の目の前にいる人は、この国で生まれ、この国で育ち、この国で結婚し、この国で子を育て、この国の

言葉で話し、この国で生活しているのです。

それは、ほとんど日本人そのものです。

彼女が、日常の会話はすべて日本語です。それは、外国人が、日本語を話すというのではなく、それが彼女自身の生まれながら身についた言語であるが故に、彼女自身ほとんど外国語を使っているというような格別な意識など持たずに話していると思います。

事務左様に、彼女の生活全体が日本の風土習慣にピッタリと溶け込まれて、中断するところが無いように、少くとも彼女には見えるのです。

勿論、見えてゐる水面の下に潜れば、そんな大雑把なものではない、複雑に錯綜したものがあるかもしれない。いや、あるのでしょうか。それはしかしあくまで水面の下です。

だが、このときの私は歩いていた平坦な道が、突然割れて暗い穴に墜ち込まれたように、とまどい、まごついたのです。

それを言葉に出して言えば、

「エッ、彼女さんは外国人だったの？」

と念ふのでしょうか、その言葉はさすがに声には出しませんでした。

但し、それはすぐ納得出来ることで、外国人登録云々

は、理屈として頭の中に消化されました。それでいて、たった今、ゆさぶられた日常感覚は、小さな波紋となつて、いつまでも残るのです。

文字に書けば、かくも長々しく、それでも説明不足のうらみをまぬかれないそのときの私の、立ちすくむような心理状態は、しかしながら、時間にすれば数秒にもみえない瞬間のことでした。

「今日でなくてもええけど、××日が期限やさかい、それより、おそうなつてもあかんねん。」

こういう面倒な用事はこの男にかぎると思ひこんでいる口調で姐御が続けます。

「いいですよ」

と答えながら、この用事は日曜では駄目だし、××日までの日数をにらみ合わせて、やはり、今日しか無いな、と胸の中で計算しました。

「今から行つて来ましょう」

「すまんア、電車賃ぐらい出すよつてな。やっぱり替やんでないと、こんな用事は頼まれへんわ」

と、姐御は調子いいのですが、私の方はいささか気が重いのです。

楽しみにしていたカメラはお預けになったし、それよりも私だって、役所や役人は嫌いなのです。

仇名は彼に似つかわしいのです。

「切れ者」と政治ジャーナリズムが評価した池田総理とは正反対に、池田ソーリは素朴な青年で、どことなく間のびしていました。

名前を呼ばれても、ワテンボおくれで返事がもどつてくるような若者が、時の総理と同姓なのが、ソーリという仇名で一層ユーモラスになつてしまふのです。

おまけにソーリは、物の言い方が舌たるくて、幼児のようなおかしさをそえます。

彼の発音だと

「水」が「ミルッ」になり、

「有料道路」は「ユーレイローロ」になつてしまふ。

「ソーリ、名神高速はユーレイローロやったのう」

などと、土工仲間がからかうのは、サディズムや悪意とは無関係ないたづらっ気なのですが、だからソーリは腹を立てず、ニヤニヤしているのですが、からかいながらも何とも言えぬおかしさを感じて、吹き出してしまふ仲間たちでした。

ソーリは無趣味な若者で、飯場労働者なら、たいていは「飲む、打つ、買う」のどれか一つ、或いは全部を楽しむのに、酒は体質的に受けつけず、バクチは無い、女も買わないという有様で、口の悪い仲間から

人でした。

総理大臣と同姓だから、仇名がソーリ、この単純な発想のネーミングの主は平山親父でした。

総理と漢字でなく、ソーリと仮名で書く感じで、この

「あいつは何が楽しみで生きているんや」と言われたりしますが、人が好いので、他人の恨みを置けません。

貧乏人から慕われた池田総理と違って、飯場の池田ソリーは、仲間から好かれていました。だから、内閣の首班が、池田隼人から佐藤英作に変わったも、ソリーはやっぱりソリーなのでした。

「神戸なら一詣に行こうか」

というソリーに、私は返事をためらいました。用事が用事だから連れない方がいいと、何となく思ったのですが、それを理由に同行を拒むのは、この好人物の若者に対し、いかにも気の毒です。

それに（用事が用事だから）と思いながらも、では何故、この用事に連れが不必要なのかと自分の心に問いかけると、ハッキリした答は一つも用意されていないのです。そのとき、表に車の止まる音がしました。

(二)

やったんやし」

と姐御が言っていたことがあります。

（芦屋に住む人）

と言えば、通常感覚では上流階級を連想してしまふのが、関西人の通り相場になっていますが、武田アブジはそんなことには縁もゆかりもない人でした。行ったことがない私には、その真偽を証言する資格はありませんが、古参の飯場仲間の話を信じれば、彼のネグラーは、一坪たらずのバラックだそうで、そこでこれ以上は省略不可能という簡素な生活をしているそうです。

「アブジの部屋は、横になると頭が東の壁にあたって、足は西の窓からニヤリと出る」

などと若い土工たちからかわれても、否定しませんし、何よりも一ヶ月に十日ぐらいしか働かないので、その程度での収入での生活がどんなものか想像できるといふものです。

「天災と武田アブジは忘れた頃に来る」

なんて悪口は誰が言いはじめたのでしょうか。そんな言葉に勿論、気味がいいはずはないのですが、カンカンになって怒り出すということもありません。

車の主は、松本の末弟の繁雄で、武田のアブジが同乗していました。

私が平山飯場に入った頃（一九六〇年）には、まだ中学生か高校生だった繁雄は、いつの間にかや

「アレにも早く嫁を」

と、松本親方や平山姐御が気をもむような好青年になっていた。

弟んだ本田親父や、松本親方は、半分は酒やけの赤ら顔で、色が黒いの、この弟はスラリとした長身だけが二人の兄に似て、色はむしろ平山姐御に似て白く、なかなかハンサムでした。

リーセントや、サングラスが顔面の顔に似合って、それが悪連隊風ではなく、むしろ坊ちゃん風に品があって、見たところ申し分のない気の利いた若者です。

ただ、これまでは西宮の本宅にいて、尼崎の飯場に顔を出すことが少く、なじみがうすかったのが、この頃から現場へ出るようになったのです。

アブジは松本組の古参で、芦屋から通勤している人です。武田徳太郎、本名は崔。

うしろへ反り返るくらい背筋を伸ばして歩く、顔の広

い、やせた中年男で

「みんなバカにしているけど、若い頃の武田さんは男前

武田アブジは、吊り上った眼、意思的に固く結んだ大きな口、えぐりとったような頬と高い頬骨、そうした外見の精さに似ず、世俗に超越して、五十才をすぎたチョンガー怒しを気楽にたのしむ人のようでした。

何日も無断で休んだ後で、ひょっこり飯場に姿を見せることがあります。そんなとき、アブジは照れもせず、悪びれもせず、のほほんとした顔を松本親方の茶の間に

出すのです。

「コメ貸せや」

開口第一声がこれでした。

それはいつもの決まり文句で、その他のことは何一つ言いません。

「何白休んだら気がすむんや」とか

「たまには仕事にも顔見せいや」とか

「病氣でもしてたんか」とか

松本親方や姐御が声かけても、馬耳東風で、口の中でムニャムニャいうばかり、さっぱり顔を得ません。

そのうち親方の方がくたびれて口をつぐむと、

「コメ貸せや」

と、これだけはハッキリ言うのです。

結局はアブジの粘り勝ちで、根負けした親方が姐御にアゴをしやくります。